

京都府教育委員会教育長 様

令和8年 3月 12日

ラ ボ 名	探究活動とキャリア形成
代表者所属名	京都府立山城高等学校
代表者職・氏名	教諭・坂 拓典

京都府立学校授業力等向上ラボ支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 ラボ名

探究活動とキャリア形成

2 研究テーマ

探究活動のアップデート、生成AIの活用を考える

3 研究の目的

総合的な探究の時間の探究活動について研究し、今ある探究活動をさらに発展させ、探究活動のテンプレートを作る。主体的に探究できる生徒の育成を目指し、生成AIを活用した新しい探究の形を考える。

4 研究の成果と課題

【成果：生徒の変容と探究の深化】  
主体性を維持したAI活用モデルの確立  
「1学期：自力構築（AIなし）→ 中間発表後：再構築（AIあり）」という段階的導入により、生徒がAIに依存せず、自身の思考を磨くための「道具」として活用する姿勢が定着した。  
論理構成の精緻化  
AIによる批判的フィードバック（イシュー型分析）を通じ、仮説と結論の整合性、反論への言及、具体的なデータ収集方法の検討など、探究の質が劇的に向上した。（生徒の90.9%が質の向上を実感）

高度なAIリテラシーの形成

生徒自らが「AIに0.1%でも自分で考える余地を残す」「情報を鵜呑みにせず比較する」といった自律的なルールを模索し、批判的思考力を獲得した。

【課題：次年度への改善点】

ハルシネーション（AIの嘘）への対応力向上

生徒がAIの回答の真偽を確認する際、より信頼性の高い一次情報（論文や公的統計）にアクセスするための指導法の確立。

評価指標の再定義

最終成果物だけでなく、AIとの対話プロセス（プロンプトの工夫や修正の過程）をどのように評価に反映させるかという基準の構築。

5 研究成果の波及方法

【モデルのパッケージ化と共有】

生成AI活用型「探究活動テンプレート」の展開

本研究で構築した5ステップ（自力探究→中間発表→AIフィードバック→再構築→最終発表）をワークフロー化し、他校でも導入可能なパッケージとして共有する。

共有Gemライブラリの構築

山城高校で開発した「イシュー型フィールドワーク支援AI」などのCustom Gemsを、3校（山城・鳥羽・福知山）共通ドメイン内でライブラリ化し、教員が即座に活用できる体制を整える。

6 研究（活動）実績\*

年月	研究（活動）内容（具体的に記載）	活動場所
2025年5月	研究計画の策定と3校連携の合意（山城、鳥羽、福知山の3校体制が発足）	
7月	生成AI導入に向けた事務的検討の開始（セキュリティと継続性を考慮し、独自ドメイン取得を検討）	オンラインTeams
9月	ラボ独自ドメインの取得申請（教育委員会・事務部と連携し、3校共通のAI基盤の構築に努めた）	山城高校事務長が3校を取りまとめ
	総合的な探究中間発表の実施（AIを一切使用せず、自力で構築した探究内容を発表）	山城高校
	独自CustomGemの開発と検証（探究を深化させる「イシュー型支援AI」を教員側で先行試作）	山城高校
	AIフィードバックの導入（中間発表資料をAIに読み込ませ、論理チェックと再構築を開始）	山城高校
10月	AIをコーチとして探究を深化（AIが提案し	山城高校

2月	た調査手法を元に、生徒が具体的なデータ収集を遂行) 福知山高校への視察 ライセンス調達の最終調整（有料ライセンスの見積もり依頼及び発注準備) 研究成果の集計と次年度継続の合意（生徒アンケートの実施、およびミーティングでの継続意思確認)	福知山高校 山城高校事務部  山城高校
----	--	------------------------------

## 7 予算執行状況

- (1) 旅費・研究会等参加費は、旅費等執行状況報告書に記載のとおり
- (2) 図書については、受領書のとおり

## 8 他校へ勧めたい実践又は他校へ呼びかけたい共同研究（できるだけ具体的に）

テーマ	「京都府版・探究支援Custom Gems (AIツール) の相互共有と検証」
育てたい資質能力	主体的な問いの構成力： AIに依存せず、自身の内発的な関心から課題を発見する力。 メタ認知能力（批判的思考力）： AIの提示する回答を鵜呑みにせず、自身の論理と比較・検証し、自らの思考を客観的に捉え直す力。 情報活バリテラシー： 生成AIの特性（ハルシネーション等）を理解し、思考の補助として適切に使い分ける力。 論理的表現力： AIを介して得られた膨大な情報を、数学的根拠や事実に基づき、他者に納得感を持って伝える力。

<p>実践又は研究の 具体的内容</p>	<p>「AI不使用期間」の設定と中間発表： 1学期はあえてAIを禁止し、生徒自身の足と頭で「問い」を形成させ、中間発表までを完遂させる。これにより、探究の当事者意識を確立する。</p> <p>「中間発表フィードバックAI」による論理精緻化： 2学期冒頭、中間発表の内容をAIに読み込ませ、「論理の飛躍」「不足している視点」「追加調査の提案」を出力させる。生徒はAIと対話しながら、自身の仮説を再構築する。</p> <p>情報の精査： 最終的な結論や調査手法の選択は必ず生徒自身が行い、AIの活用箇所を明示する運用を行う。</p> <p>「探究支援Custom Gems (AIツール)」の共有と相互検証： 本プロジェクトで開発した「 이슈型支援AI」等を、独自ドメインのプラットフォーム上で他校の教員とも共有。各地域・各教科の文脈でカスタマイズし、その教育的効果（生徒の変容）を比較研究する。</p>
--------------------------	--

※ 紙面が不足する場合は、適宜行を足してください。